

六郷を探る会

藤塚・井土編



六郷市民センター

平成 1 7 年 9 月 7 日

洪水とたたかってきた集落 藤塚

- 1 明治末に消えた寺「高福寺」
高福寺・藤塚常盤の墓と藤塚家
阿弥陀佛碑・馬頭観音塔
- 3 流れつuitaご神体と藤の筏「五柱神社」
五柱神社・藤塚碑・萱刈地の払下げ記念碑
郷蔵（米蔵）・左巻きの藤
- 5 親子二代の教育者「島貫家」
- 6 林子平もかかわった塩づくり「製塩所跡」
- 6 塩を積み牛が歩いた「牛道下・中道下」
- 6 「トイヤ」とよばれた魚市場があった
- 7 閑上大橋完成で姿を消した「渡し舟」
- 7 明治になってできた「貞山堀（新堀）」
- 8 豊かに生きものを育む海「井土浦」
沈礁・梶家前
- 9 「太夫野林」名に二つの説
- 9 洪水対策で設置「井土浦川閘門」
新堤防の建設計画

四方を海に囲まれた陸の孤島だった 井土

- 10 松の木と落雷の伝説「山王原屋敷」跡
- 10 三つの村の境「壺瓶塚」跡
- 11 七人の農民が移住「井土浜草分けの地」
- 11 村人の信仰を伝える「供養碑」
- 11 相馬藩から移住した武士の集落「中村吉田屋敷」跡
- 12 軍需用鉄もつくられた「砂鉄採取場所」
- 13 火災と火葬二つの伝説「焼浜」
- 13 沼の跡地をレジャーランドに「海岸公園・冒険広場」
- 14 住民が植えた三十万本の松「海岸林植樹碑」
- 14 仙台市東部全域の雨水を排水「二郷堀排水機場」
- 14 この松を目印に歩いた「一本松」
- 15 町内で一番低い場所「樋口」
- 15 サイカチの古木
- 16 その他の事柄、場所跡
八坂神社・雷神碑・山神・薬師堂・海楽寺

六郷を探る会

洪水とたたかってきた集落 藤塚

ふじつかはま
『藤塚浜』 現仙台市若林区藤塚

名取川河口の左岸に立地し、東は太平洋に臨み、海岸線に並行して貞山堀が南流する。南は名取川を隔てて閑上（名取市）。西は種次、北は井土浜。

宝治元年（1247）七月十八日の北条時頼袖判下文（斎藤文書）によれば被官平（曾我）光広に名取郡土師塚郷の地頭代職を勲功の賞として与えており、土師塚は藤塚の旧称と考えられる。天文七年（1538）の段銭古帳に名取のうち「ふしつか 六百五十文」、「ふしつか 六百文」とあり、伊達氏の所領であったことがわかる。

慶長十八年（1613）の伊達政宗材木持申付黒印状（伊達家文書）によると、百人の人足に対し閑上より藤塚を経て仙台城下まで三度にわたって材木持をするよう命じている。「正保郷帳」には高五貫八百十九文、畑方とあり、水損と注されている。また、幕末のものと思われる村毎貫高付（斎藤報恩会蔵）には六貫九百八十三文、「封内風土記」には戸数三十五、「名取郡地誌（皇国地誌）」には戸数四十六、男百七十・女百五十四、馬二十二、舟十九艘と記されている。物産に魚類はみえず、かや六十駄、のし（熨斗）二千枚などがある。

（平凡社「宮城県の地名」参照）

明治末に消えた寺「高福寺」

地図①

若林区藤塚字屋敷18

『高福寺』

高福寺は六郷に多かった真言宗派で、明治政府の呪術禁止の方針により廃寺になった。

元禄十年（1697）の除屋敷帳には「代壺貫文、明神別当真言宗高福寺、但海上為御祈禱津奉行所手前より渡る。五社明神（＝五柱神社）壺間四面板葺、別当右同寺」と記され、明神社の別当は高福寺と五社明神を兼ねていたことがわかる。



現在は藤塚公会堂となつて
いる高福寺跡



『藤塚常盤の墓と藤塚家』

藤塚常盤の墓石には明治六年（1873）、享年五十八と刻まれる。常盤は藤塚村での塩つくりを塩釜神社の神官として有名な藤塚知明（＝式部）とともに指導したと言伝えられる。（知明の屋敷跡は塩釜神社の博物館の場所にあった。）

知明は元文三年（1738）桃生十五浜の大須浜（雄勝町）の漁師の子として生まれ、塩釜神社の社家・藤塚家三代目知直の養子となり、四代目を次ぐ。晩年は仏僧と神官の争いに巻き込まれて幽閉され、寛政十二年（1800）に没した。

常盤は知明没後約十五年後に生まれ、藤塚家にかかわりをもつ巫女などと推察される。（家系図では不詳）

塩つくりの指導者だった藤塚常盤



藤塚家は文禄年中（1592～6年）まで塩釜神社別宮付の社人で、宮城郡市川村（現多賀城市）に居住していたが、その後禄から離れ社人の職掌も中絶して名取郡藤塚村に落魄していた（居住場所不詳）。先祖の藤塚備後掾が十八歳の慶安四年（1651）再び召出され、社人に列した。その時姓を藤塚と称した。

『阿弥陀佛碑』

二基のうちの一つは正徳四年（1714）と刻まれている。井土浜の共同墓地にも翌正徳五年と刻まれ、同じ大きさ・形の供養碑が建っている。この板碑の形は東北地方の布教の途中で没したとされる時宗（衆）の祖師一遍上人によるものではないかと推察されている。



『馬頭観音塔』

地図⑤

馬頭観音は六観音菩薩の一つで、悪を懲らしめ粉碎する観音さま（＝馬頭さん）である。優しい顔をした観音像のなかでは珍しく憤怒相（怒った顔）をしている。

近世になると、仏教では畜生道の救済にあたるようになる。農村では馬は極めて大切なものであった。

馬頭観音は頭上に馬の頭を載せているところから、愛馬の死に際して、この馬頭観音の像を刻んだ石塔を建てて亡き馬の冥福を祈り、行路（旅）安全の仏として路傍に立てた。

流れついたご神体と藤の筏「五柱神社」

地図②

若林区藤塚字屋敷49番地

『五柱神社』

康平三年（1060）源頼義・義家父子が東征の際、常陸国村松（茨城県東海村）に勧請した神社とされる。（安永元年（1772）の封内風土記による）

永享七年（1435）足利持氏（関東公方）が常陸国を攻略の際兵火に罹り、何人かが新たに藤塚の地に遷座したとされる。

宮城県史によると伊達政宗が遊獵の際ここに立寄り、筏に乗った五社（五柱）の神がこの浜に漂着したとの古伝を聞いて社殿を改築した。その後藩主の忠宗・重村によって造営されたことが棟札に記されているとされる。



五社を祀る五柱神社

明治四十一年（1908）明治政府の神社合祀令により井土浜の八坂神社、種次の稲荷神社を合祀して、天照皇大神・春日神社・賀茂神社の五社を祀る。

昭和二十年代まで、境内には樹齢四百年をこえるような松の古木が茂り、昼でも暗いほどだったが、三十年代に入ると、製材用に少しずつ伐採されてしまった。境内には藤の古木も多かった。また、地元には、洪水のときに境内にあった鐘楼が砂に埋まり、そのままになっているという言い伝えがある。

今の社殿は平成五年（1993）、土地の方々の芳志でみごとな神社に改築された。

『藤塚碑』

藤塚碑は藤塚地名の由来が記され、藤塚由来碑ともいわれる。石碑は「神武天皇即位紀元（皇紀）二千五百五十五年（1895）」を記念して、同年の明治二十八年に建立された。



碑文には藤塚の由来が記されている

碑文には次のように記されている。朝廷が蝦夷征伐のため持節將軍とする播磨按察使丹治比縣守



一行を陸奥国に派遣した。養老元年（717）嵐に遭い名取里浜（開上浜）に打ち上げられ、藤蔓筏に乗った観音像を地元の人が見つけたという。

この藤蔓を対岸の中島浜に埋めて塚を築いたところ、ここで芽が出て成長したのが左巻きの藤（P5.参照）である。以後中島浜を藤塚浜と改称したと言伝えられる。



五柱神社のすぐ裏手には
伝説の藤の切り株が残っ
ている

丹治比縣守は続日本紀に養老四年（720）に郡山国府（Ⅱ期官衙）に派遣され、八ヶ月勤務したことが記されている。また、東北赴任前の養老元年（717）阿部仲麻呂らの第九次遣唐使節団の押使（正使）として難波津から出帆、十月頃長安に入城した。帰国後、按察使の新設に伴い、養老三年（719）七月武蔵守兼按察使に引き続き、播磨按察使に任じられたとされる。

『萱刈地の払下げ記念碑』

藤塚碑とならんで建つ
萱刈地記念碑



碑文には、この地域は古来より萱の生産地として知られ、その産額はあなどり難い額であった、と記されている。

土地は国のもの、地上の産物（萱）は民のものとして、萱は藤塚・井土両区民に払下げられていたが、洪水害などによる生活の困窮により、村民は土地の払下げを強く要望した。念願がかない大正十三年（1924）五月三十日に払下げられたのを記念して、この碑が建立された。

田舎では昭和三十年代まで萱葺き屋根の家が多く見られた。萱は約二十年毎に取り替えられるので貴重な収入源であった。

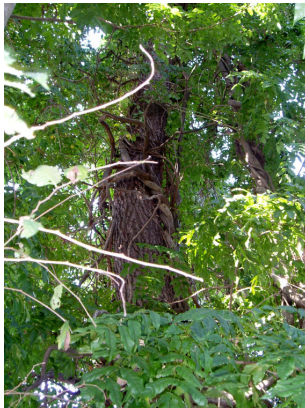
『郷倉（米蔵）』

国の統制による供出米を保管する倉庫を昭和初期に集落ごとに建設した。倉庫の白壁には、天皇家の菊の御紋をあしらった空気孔がある。



藤塚と下飯田集落に
現存する菊の御紋の蔵

『左巻きの藤』



五柱神社の松の木にからまる藤の古木が数株あった。この藤の下をくぐると疫病を避けられると信じられ、明治の頃大いに繁盛したと伝えられる。この藤は普通のものとは違って、みな左巻きであったという。

植物学的には左巻きの藤をヤマフジと云い、関西以西に多く花の丈が短く大きい。右巻きの藤はノダフジと云い、主に東北に多く花房が長く小さい。藤塚の藤はヤマフジであったと思われる



松の木にからみつく
藤の大木は左巻きに
伸びている

親子二代の教育者「島貫家」

地図③

島貫兵記は江戸末期に仙台藩士に取り立てられ、郷土の藤塚浜に永住した。貞山運河の延長工事の立役者としてその設計に従事したとされる。

(天保九年(1838)の貞山掘関係文書による)

晩年に至って藤塚浜肝煎役・三浦家の村代書人として執筆にあたり、村の先駆者として働いた。後には子弟を集め珠算塾などの寺子屋を開き、教育に尽力した功績は非常に大きい。今泉の祐善寺過去帳によると天保十三年(1842)に没し、同境内に葬られたとされる。

文政五年(1822)から明治六年(1873)まで藤塚浜には臨海堂と称する寺子屋が開かれていた。万延元年(1860)には生徒数が男子五十人であったという。この時の教師が兵記の子、一和である。島貫家は親子二代の教育者であった。

書院造りのお屋敷と
みごとな庭園



島貫家の屋敷は平成十八年から建設予定の新堤防造成のため撤去される。

林子平もかかわった塩づくり「製塩所跡」

地図④

藤塚浜は常に洪水害とのたたかいであった。農耕地も不足していたため、生活の支柱は常に混沌としていた。

藩政時代後期には盛んに開発事業が興され、藤塚浜でも製塩が行われた。藤塚式部（P.2 参照）と友人の林子平が協力して、初めて大釜を使っての製塩法を伝えたのである。

塩場周辺には事業を円滑に進めるために務所（＝御役所）が置かれた。ここで肝煎（世話人）を務めたのが三浦家だった。製塩所は貞山堀（新堀）が掘削された頃にはすでになかったと思われるが、三浦家は現在もこの場所にあり、今も地元の人々はこの家を「オヤクショ」とよんでいる。

現在は畑になっている塩田跡



仙台藩の塩づくりは藩財政を維持するため塩専売制をとり、幕末まで厳しく管理したと記される。

塩を積み牛が歩いた「牛道下・中道下」

塩の運送は、丸太を車輪代わりとするドン車に積んで、牛に引かせた。その道が御殿場、三角田、名取川沿、今泉小在家、飯田八幡社、三橋へと通ずる通称・牛道街道（駄賃道）である。牛道下・中道下の地名は今も残されている。

「トイヤ」とよばれた魚市場があった

地図⑥

地元の人たちが捕った魚を卸す魚市場があり、「トイヤ」とよばれていたという。三浦さんという家だった。いつ頃まであったのかははっきりしないが、貞山堀（新堀）掘削の前のことではないか。魚は塩と同じように、竹野花～今泉小在家～日辺～三橋と名取川沿いに広瀬橋まで運ばれ、そこから城下へ入ったものと思われる。

閑上大橋完成で姿を消した「渡し舟」

地図⑦

十七世紀伊達政宗は、名取郡内の名取川・広瀬川・阿武隈川を始め増田川・川内沢川・志賀沢川の河川改修工事を行い、湿地干拓工事と新田開墾を進めていた。その結果、新しい集落が次々にできて、名取郡が六十六の郷になったと考えられている。

名取郡北方の沖野・日辺・飯田の一部と三本塚・二木・種次は名取川をはさんで対岸の閑上地区と川向かいであることから、この六つの郷を向い六郷と呼んだとされる。



昭和四十七年（1972）閑上大橋が完成するまでは、閑上地区との往来は小舟によって盛んに行われていた。渡し場跡には「名取川 藤塚の渡しの地」と刻まれた記念碑が建てられている。

明治になってできた「貞山堀（新堀）」

地図⑧

新堀は七北田川と名取川間の貞山堀で、木曳堀（阿武隈川と名取川間）から約二百八十年遅れて明治二十年（1888）頃に完成した。

明治政府は明治十一年鳴瀬川河口の野蒜^{のびる}に外港を計画、北上川と野蒜^{のびる}を新たな運河で結んだ。宮城県も新堀、木曳堀の大改修を行い、阿武隈川からのルートを整備したのである。

明治二十年に東北線が塩釜まで開通すると、物流の花形は鉄道に移り貞山堀は次第に役目を終えた。

見事だった松も最近枯れが進み、かなりの数が伐採されてしまった



豊かに生きものを育む海「井土浦」

地図⑨

新堀の両側に広がる井土浦は、日本の重要湿地五百選のひとつで仙台海浜鳥獣保護区にも指定されており、重要な水生生物が棲息^{せいそく}している。

広大な井土浦は自然の宝庫



井土浦は仙台市が整備を進めている新堀沿いの海岸公園のうち、名取川河口の藤塚地区をバードウォッチング（野鳥観察）などができるネイチャーランド（自然公園）として計画されている。

『沈礁（通称ツンショウ）』 ちんしょう

井土浦は広大な入江であり、その様子は明治十年頃（1878）の図面に見られる。その後新堀（貞山堀）の改修工事にあたり波除けに石を沈めたが、その場所をツンショウ（沈礁）と呼んだ。また、新堀対岸の細長い堤防の海側には波除けのため石垣を積んで補強してある。

『梶家前（通称カチケメ）』 かじ

梶は船をこぐ舵^{かじ}のことである。責任者は船頭^{せんどう}で梶家は船頭が住んでいた所と推察される。

皇国地誌には井土浜の戸数は五十一戸、日本形船五十七艘（うち五十石未満漁船七艘、川合木船五十艘）、また、藤塚村の戸数は四十五戸、日本形船十九艘（うち五十石未満漁船八艘、川合木船十一艘）と記されている。両村とも漁業が盛んであったことがわかる。

五十石未満の船は近海漁業用の大型船で、この辺りが河口（港）であった。ここは東北の風が強く吹き、川から流される泥砂と衝突して河口に近い所に砂洲^{さす}をつくり浅くなるため、出入りする漁船の遭難事故が多かったと思われる。

そのため、この浅瀬の河口を行き来する漁船は、熟練した水先案内人（船頭経験者）が陸から誘導する必要があった。カチケメはその船頭（梶家）が住んでいた高台と思われる。

水先案内人は近年まで名取川河口の閑上側に常駐していた。

「太夫野林」名に二つの説

地図⑩

井土浦の西側に広がる林が太夫野林（通称タイノ）である。太夫野林という珍しい地名には二説が考えられる。

一つは伊達政宗が日辺の正楽寺に井土浜の地（現藤塚分）松園一町歩を寄進したことによる説。（太夫＝大夫は松の別名である。）

もう一つは藤塚家の先祖が、落ちぶれて社家を離れ藤塚の地に住んだことから、藤塚姓を名のるようになるが、安永四年（1774）年の風土記御用には塩蒔太夫と称していたとの説である。



洪水対策で設置「井土浦川閘門」

地図⑪

閘門とは水位の異なる水面に舟を通らせるために設けた水門のことである。



昭和三十七年頃に六郷地区の耕地整理が行われ、同じくして大倉ダム・二郷堀排水機場なども整備された。これによって、東部地区の洪水害は大幅に減少した。

『新堤防の建設計画』

標高1m足らずの沿岸部の藤塚は常に洪水害に悩まされてきた。その対策には二つの問題があった。雨水の排水能力不足による内水問題と、名取川の増水による外水問題である。

内水については、昭和六十一年（1986）8月5日の「8.5豪雨」を契機に雨水幹線が整備された。

外水については高さ3.1mの新堀堤防（サイクリング道路兼用）があるのみである。ところが、この堤防を嵩上げすると深沼の住宅地が浸水してしまう。

そのため新堤防は、名取川河口まで完成している高さ約4.5mの堤防を新堀側に延長させ、深沼までの途中で新堀を横断させる計画としている。2006年に着工の予定である。



サイクリング道路は堤防だった

四方を海に囲まれた陸の孤島だった 井土

いどはま
『井土浜』 現仙台市若林区井土

藤塚^{ふじつか}浜の北、宮城の海岸平野^{ひんてい}の浜堤上に立地する。東は太平洋に臨み、西は井土浦川^{いどうら}で二木^{ふたき}と接し、北は二郷堀^{にこう}で荒浜^{あらはま}と接する。また東部には海岸線と並行して貞山堀^{ていざん}が南流する。

長稱寺記録^{ちようしょうじ}（二木^{ふたき}律家蔵）によると寛永九年（1632）に開発がはじまり、寛文三年（1663）二木村から分離する。正保二～三年（1645～6）頃の「正保郷帳」に田五貫五十五文・畑壱貫七百三十文とあり、水損と注される。幕末と思われる「村毎貫高付」（斎藤報恩会蔵）では二十三貫百七文とあり、開発が盛んであったことがわかる。安永元年（1772）の「封内風土記^{ふうないふどき}」によると戸数は三十七戸であった。また「名取郡地誌^{なとりぐんちし}（＝皇国地誌）」によると明治十年（1878）頃の戸数は五十三、男二百六・女百八十五、馬三十一で、舟が五十七艘あった。物産に鰻^{うなぎ}百貫、鮭^{さけ}八十尾、鯛^{いわし}四百駄と記される漁業中心の村だった。
(平凡社「宮城県の地名」参照)

サナバラやしき 松の木と落雷の伝説「山王原屋敷」跡

地図⑫

寛文三年（1663）天台宗総本山比叡山の鎮守神・山王神^{さんおう}を祀っていた松の木に落雷があり焼失した跡地を山王原屋敷^{サナバラ}（＝通称ハラ）として言伝えた。

なお、三本塚（旧二木）字権太^{ごんた}の地にもサナバラ屋敷跡が言伝えられる。ニシハラ（西原）、ハラ（原）の地名も残されており、城郭^{ものみどころ}（館）の物見所であったとの説もある。



山王原屋敷跡付近の現在の様子

三つの村の境「壺瓶塚」跡

地図⑬

山王神が落雷で焼失した際、祭祀に使用していた壺^{つぼ}や瓶^{びん}を近くの入江に埋めて塚を築いた所が壺瓶塚^{つぼびん}である。壺瓶塚は大口古墳跡^{おおぐち}とされ、二木字大口^{おおくち}の地名として残る。

この塚は二木村、三本塚村、井土浜の境界点だった。

七人の農民が移住「井土浜草分けの地」

地図⑭

長稱寺記録によると慶長十六年（1611）大津波があり、寛永九年（1632）二木村から七軒の百姓が井土浜のこの地に移住し荒地を開墾、草分け百姓になったという。

この地は現在二木分であるが、明治十年（1878）頃の図面では井土浜分であった。壺瓶塚が築かれた寛文三年（1663）井土浜は二木村から独立した。

村人の信仰を伝える「供養碑」

地図⑮

山神は宮城県小牛田町斎ヶ岡に鎮座する山神社の守護神で男・山神は山仕事の神様であり、女・山神は子授・安産の神様である。祭神として薄命の美女木花佐久夜比賣命を祀る。石碑は文化二年（1805）に建立された。

雷神は雨乞いの神様として祀られた。村人達は干ばつが続くと雷神さまに集まり太鼓・鐘などを鳴らして雨乞いをしたと言い伝えられる。石碑は安政四年（1857）に建立された。

阿弥陀佛碑は本来仏陀の信仰碑であるが、飢饉の際の餓死者を供養するために立てたものも多い。石碑は文政五年（1822）に建立された。



石碑群は農村共同社会の助け合い（講）と神頼み、仏信仰の証し

相馬藩から移住した武士の集落「中村吉田屋敷」跡

地図⑯

古老の話によると、慶長津波の後に福島県相馬地方の武士であった相澤家、大友家、柴崎家などが移住して中野集落ができたと言伝えられる。相馬の地名にちなんで中村屋敷、吉田屋敷とよばれていた。この地は現在も住宅地である。

軍需用鉄もつくられた「砂鉄採取場所」

地図⑬

約六千年前の「縄文の海進」(*1)以降、六郷あたりは地盤形成過程で三列の浜堤（砂浜）ができる。その三列目の浜堤の浪打ち際に砂鉄が帯状になって堆積した。

近年は防潮堤の造成と海岸侵食により殆ど見る事が出来ないが、昭和十六年頃（1941）長町（太白区）にあった東北特殊鋼では、井土浜の砂鉄から軍需用に鉄を生産した。

(*1) 温暖化により今より海面が数メートル高かった時代



浜砂鉄の宝庫だった井土浜
東北特殊鋼（株）「社業の現況」より（昭和十六年頃）

“砂鉄より製鋼への一貫作業！！”～井戸濱砂鑛場のある日～
“乾燥・採鑛・運搬・選鑛機・積出し”の各工程の様子がうかがえる。

火災と火葬2つの伝説「焼浜」

地図⑱

焼浜の地にも二つの説がある。

長稱寺記録によると慶長十六年（1611）地震・大津波があり、井土浜は流失し荒地になった。その地に寛永九年（1632）二木村から七軒の百姓が移住して開墾した。延宝三年（1675）夏、再び大津波が襲来し川の東側に移り住んだ。しかしその地も火災に遭い、その場所を焼浜と呼んだという。

もう一つは、江戸末期に伝染病などによる死者を火葬した場所である、という説である。それを物語るかのように、現在、雑木林になっているこの地に、釋・明廻嘉永六年（1853）釋・浄教と釋・生念安政六年（1859）の二基の墓石が残されている。

沼の跡地をレジャーランドに「海岸公園・冒険広場」

地図⑲

仙台市が整備を進めている新堀沿いの海岸公園のうち、「冒険広場」が2005年7月に開園した。太平洋を望む広場は家族でキャンプを楽しんだり、大型遊具で子供たちが遊んだりする本格的なアドベンチャーランドで、隣りは民間の馬術場である。

この広場は2001年の「みやぎ国体」で馬術競技が行なわれた6.9ヘクタールの土地を整備したもので、54区画のキャンプ場や展望台が配置された。

この場所は安永元年（1772）の封内風土記によると、長三町（約320m）、径二十五間（約54m）のおご小午沼であったと記されている。深さ3mほどの底から湧き水があり、ハスの花が咲いていたという。

昭和三十年代に市のゴミ捨場となり昔の面影が消えたままとなっていた沼地が、海岸公園・冒険広場へと整備された。

さまざまな遊具が並ぶ



馬術場の厩舎



東屋からの眺めは最高

住民が植えた三十万本の松「海岸林植樹碑」

地図②⑩

藤塚・井土両民が、潮風を防ぐため三十万本の松を植えた記念碑がある。石碑は大正三年（1914）に建立された。

碑には、次のように記されている。両区で開拓が行なわれたが、潮風による塩害に悩まされた。そのため六郷村山田甚助村長の尽力により、二十五町歩の荒地（砂浜）に潮風を防ぐため三十万本の松を植林した、というものである。

石碑の費用には千九百六十円（今の金額で約四千万円）を要し、百年の大計のもとに進めたとある。見事な松林は先人の残した遺産であった。

仙台市東部全域の雨水を排水「二郷堀排水機場」

地図②⑪

二郷堀排水機場は口径1200mmのディーゼルエンジンポンプ3台と口径800mmの電動ポンプ1台を設置する市東部ほぼ全域の雨水を排水する設備である。

それにもかかわらず昭和六十一年（1986）8月5日の「8.5豪雨」では、井土地区の田畑が三日間浸水した。被害を大きくした理由は新堀への大量の排水により、水位が上昇して排水能力を制約したためである。

この豪雨を契機に、雨水幹線と今泉排水機場を新設して名取川に排水するように整備された。しかし、機場からの排水と名取川増水の逆流で、堤防を越流する恐れが増したため、新堤防（P.9参照）の造成が計画されている。



この松を目印に歩いた「一本松」

地図②⑫

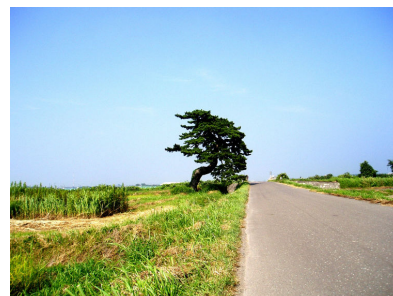
日本人は古代から人が死ぬとその魂は、一カ月間は家の棟に、一年は村はずれの一本木に、のちには山に行って山神になると信じられていた。

また、正月様は高い山から里に降りて来て、人々に幸福をもたらしてくれる神であるとされた。

春には里に降りて田の神となり、正月には「^{としがみ}大年神」として里に降り、子孫の繁栄を見守ってくれる。

正月に立てる門松は、この心霊が降りてくるときにとまる「よりしろ（依代）」として考えられていて「しめなわ（注連縄）」は大年神祭の祭場の表示とされた。このため門松は松に限らず、その土地でめでたい木を立てるのが慣わしとされる。

八坂神社の祭日には、各家々をお神輿が廻り、最後にこの一本松で祝詞奏上するのが慣わしであった。



六郷と七郷の境・一本松

町内で一番低い場所「樋口」

『樋口』

地図②③

この場所は井土町内で標高が一番低い位置にあたり、田畑の自然排水をさせるための樋（溝）の形から地名として残され、皇国地誌図面に見ることができる。井土浦川の満潮時にはこの周辺まで海水が入り込んだことが、三本塚の^{かみしおいり}上潮入地名からうかがえる。

『樋橋』

地図②④

当地区は飲料水として良質な井戸水が得られる。しかし、田畑用の農業用水は^{あたごせき}愛宕堰（以前は宮沢橋近くの^{こおりやませき}郡山堰）から取水し、三本塚経由で井土浦川の上を樋状の橋により横断して使用している。これは満潮時に海水が入り込むため井土浦川から取水でないためである。

この場所を樋状の水路橋から樋橋、または樋場とよぶ。



井土浦川の水面は
周りの田より低い

「サイカチの古木」

地図②⑤

県北の桃生町周辺にはサイカチの古木が多く残されている。

今から約四百年程前、豊臣秀吉による奥州仕置（1590年）に大規模な反乱が起こり、中世大名の名門葛西氏が滅亡した。その家中が「葛西勝ち（カサイカチ）」の祈りを込め植えたのがサイカチの木とされる。

井土字宅地1～3番地の境に直径1.2～1.3mほどのサイカチの大木が昭和四十一年（1966）まであった。他にも種次、三本塚、深沼などの市東部に近年まで植えられていたと聞く。

県北と同様、六郷と奥州仕置とのかかわりについて調査したところ、家系図などから中世の今泉城主・須田玄蕃（^{すだげんぱ}＝伯耆^{ほうき}）とかかわりがあった推定される。

①『八坂神社』(通称テンノン様)

八坂神社は明治の神仏分離前は「祇園感神院」とか「祇園社」と称し、牛頭天王またはスサノオ尊を祭神とする。「天王＝テンノウ」がテンノンに訛った。境内に豊臣秀吉を祀る豊国神社がある。

この神社は薬師堂(井土公会堂脇)の位置にあったが、明治四十一年(1908)藤塚の五柱神社に合祀されて現在地に移された。

②『雷神碑』(通称ナリガミ碑)

明治三十一年(1898)に建立された。発起人山三郎以下七名の名が記される。

③『山神』(＝通称ヤマノカミ)

慶応三年(1867)に建立されたようだが、碑面を読み取ることができない。

④『薬師堂』(通称オヤグッさん)

皇国地誌図面にはこの場所には八坂神社があった。八坂神社は藤塚の五柱神社に合祀され現在地に移され、町内の篤農家の屋敷神である薬師堂をここに移したと思われる。薬師堂に祭られる薬師如来は別名、瑠璃光如来とも大医王如来とも呼ばれ、七宝からなる浄瑠璃浄土に住む仏である。邦楽の浄瑠璃の名もここからきていとされる。

⑤『海楽寺』

皇国地誌には真宗東漸寺の末派、本浜の西方にあり、元禄十五年(1702)僧明正開基、正受庵と号し、其後明治三年(1870)九月七日僧栄明海楽寺と改号すると記されている。

寺の話では仙台東漸寺門徒・明西宛の庵号許可状「正受庵」が今日の海楽寺の礎であるという。昭和五十三年の宮城県沖地震の際、本堂が崩れ新築された。





六郷を探る会 「藤塚・井土編」

<編 集>

「六郷を探る会」編集委員

庄司 壽夫（会長）

（五十音順）

小田島 政雄・鎌田 勝美・櫻庭 哲郎

佐竹 清造・佐藤 勝五郎・鈴木 重正

西大立目 祥子

若生 昭弘（六郷市民センター館長）

加藤 千枝子・高野 綾子（六郷市民センター）

<協 力>

渡辺 清（藤塚町内会長）

渡辺 理一朗（藤塚町内会）

発行 仙台市六郷市民センター

〒984-0835 仙台市若林区今泉1-3-19

TEL 022（289）5127

FAX 022（289）6359

2005年（平成17年）9月7日